
復讐 少年達の裁き

セロリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐 少年達の裁き

【Nコード】

N4016V

【作者名】

セロリ

【あらすじ】

少年達は地下にあるバーの様な建物の中に居た
ある少年は父を通り魔に刺し殺された
ある少女は妹を放火魔の手で殺された
犯人に復讐すると誓った少年達が集まる集会所
それを人々は復讐倶楽部と呼んだ
分かりにくいのでタイトルを変えました
前タイトル復讐者ノリベンジャーノ

復讐の始まり（前書き）

初めまして、セロリと言います

この度小説を初投稿させていただきました

少し残酷な描写があります注意して読んでください

復讐の始まり

少年達は地下にあるバーの様な建物の中に居た

ある少年は父を通り魔に刺し殺された

ある少女は妹を放火魔の手で殺された

犯人に復讐すると誓った少年達が集まる集会所

それを人々は復讐倶楽部と呼んだ

それは、まだ夏が始まったばかりの日だった

ある少年はクラブサッカーチームの試合から家に帰って来た

「ただいま、父さん母さん俺ねえ

今日の試合でカッコいいシュート決めたんだぜ」

少年は家に入ったすぐに少し興奮した面持ちで家に居る家族にそう言った

「父さん、母さん??」

しかし家の中からは返事は聞こえてこない

少年は玄関から家の中に入った

ドアが開きっぱなしだったリビングの
中に入った

床一面に広がるあか、アカ、赤、紅

「父・・・さん??」

そこにはナイフが深々と刺さった姿で横たわっていた父の姿だった

「あああああああああああああ」

少年は腰を抜かし、声にならない叫びを上げた

「母さん!!母さん!!」

少年は自分の母の姿を探した

そして見つかったのは父と同じく横たわっていた母の姿だった

「父さん、母さん・・・嘘だあああああああ」

そして、少年は警察官である父と、優しかった母を失った

この事件は後に警察によって捜査されるも何もつかむ事ができず捜査は打ち切りとなった

「絶対に、絶対に復讐してやる」

その少年は誓った

その少年の名前は藤原 匠

復讐の始まり（後書き）

誤字脱字や文章がおかしい点などがあつたら指摘してもらえるとありがたいです

登場人物紹介（前書き）

新しい人物が出たら更新します

登場人物紹介

藤原 匠

16歳

幼い頃に、親を殺され犯人に復讐すると誓った少年
復讐倶楽部の設立者にして復讐倶楽部のリーダー

頭が良く、ハッキングなどは楽勝だと言う

昔はサッカーチームに入っていたが、親を殺されてからはほとんど
運動をしてないため運動はあまり出来ない
学校には通って居ない

一人称は俺

天我崎 帝

16歳

通り魔によって、父親を殺された過去を持つ
運動神経抜群で頭は悪い、匠とは真逆である
自称エアガンは百発百中

一人称は俺

園原 有可里

15歳

放火魔によって妹を殺された過去を持つ
幼い頃に親に捨てられている
頭はそれなりにいい
一人称は私

五十嵐 健人

15歳

家族をテロで失った過去を持つ

それから、爆弾を調べて爆弾で犯人に復讐しようとしている
頭はそれなりにいい
一人称は僕

登場人物紹介（後書き）

復讐者の紹介です

この小説は更新が遅くなるかもしれません

復讐倶楽部にようこそ（前書き）

第二話です

文章がおかしいかもしれませんが読んでくれたらありがたいです

復讐倶楽部にようこそ

「これから、復讐を行うために各自で集めて来た武器について説明をしよう」

俺は復讐倶楽部の部長？ 藤原 匠だ

「俺が持つて来たのは、改造エアガンだ」

こう言ったのは部員No.2 天我崎 帝

名前が厨二病ぽいだって？？それは禁句だ

「たしかに！！それはいい武器だね」

こう言ったのは部員No.3 園原 有可里

復讐倶楽部の紅一点だ、ただし怒らせると恐ろしく怖いと言っておこう

「今なんか、失礼な事考えてなかった？？」

「いや、何でも無い」

「ならイイけど」

「僕が持つて来たのはこれだよ」

そう言っ取り出したのは、

時限式の爆弾だった

こいつについて説明しよう

こいつは健人、五十嵐 健人

口調は穏やかだが、かなりの爆弾マニアだ

何でも、家族で旅行に行く日に風邪をひいてしまったが、自分なら大丈夫だと言っ家族に旅行に行かせたらしい

だが旅行先に行く途中の飛行機でテロにあっ自分以外の家族を失ってしまった

それから健人は爆弾について調べ犯人に同じ苦しみを味あわせてやろうとしていた

「私が持つて来たのは・・・
じゃジャーン 火炎瓶だよ」

こいつは妹を放火魔に殺されたらしい

まあ、なんで火炎瓶かって言うと健人とおなじ理由だろう

「おい匠、おまえが持って来たのは何なんだよ」

「そうよもつたいぶらずに教えなさいよ」

「僕も知りたいな」

「俺が持つて来たのは武器じゃねえけど・・・これだ」

そう言つて俺は一台のPCを取り出した

「何これ??」

「これは、ただのPCじゃなくなてな

ハッキング、クラッキングは勿論

電波の妨害や、電波の受信

さらに各監視カメラに直接継ないで

その映像を見る事が出来る

そうだなあ名前はPerfect? Crimeだ、意味は完全犯罪、ちなみに略してPCだ」

「なるほど、完全犯罪か」

「ハハハ、略称はそのまんまだね」

「アイテムの名前は簡単かつ分かりやすくなくてはならないからな、そしてもう一つ」

そう言つて俺はメガネを取り出した

「何だこれ、グラスンか??」

「違う違う、これはつてヘッドマウントディスプレイと言う機械を改造したもので、小型カメラが内蔵されていて、PCに継ないでその映像をPCの画面で見たり

このイヤホンから本部に居る奴がPCを通して命令をする事が出来る優れものだ」

「へえー、さすが復讐倶楽部の頭だけあつて凄いもの作つて来たね」

「ああ、有可里、お前が復讐したい相手が見つかったんだからな、気合居れてくぞ

さあパーティーの始まりだ」

「「リーダーの命のままに」「」

「・・・ねえ、それやめない?」

復讐倶楽部にようこそ（後書き）

誤字脱字、感想とつよろしくお願いします

復讐劇 準備編（前書き）

初めての復讐です

すこしおかしいですがよろしく願います

復讐劇 準備編

2人の黒服の男が話していた

「次の仕事は、あの家の家族を全員殺せだそうだ」

「ああ、分かってるさ」

全部燃やして、全部壊せばいいんだろ??」

「ああ、いつものように頼むぞMr・神山」

「ああ、大丈夫だぜいつも通り証拠はのこさねえさ」
今夜、悲劇が始まるうとしていた

復讐倶楽部 本部

「今回の作戦について説明をする、

今回のメインターゲットは有可咲紀

有可咲紀 真司だ」

そう言って俺は有可咲紀の写真を見せた

「こいつの次の仕事は午前2時に行われる、まず帝は改造エアガンで威嚇射撃をしてもらう、今回は殺すことが目的ではないから、遠くから少し外して打ち帝はここに奴を追い込んでくれ」

そう言って俺は地図を見せた

「OK」

「次にその二人はこの部屋で待機、ターゲットが出現し次第攻撃、捕獲してくれ」

「OK」

「12時までここに一旦集合してくれ、それまでは各自で自分の持ち場などを確認しておいてくれ」

「健人は少し残ってくれ」

「分かった」

「健人、お前は有可里から目を離すな」

「何で??」

「あいつにとって有可咲紀は許せない相手だ少しでもそばにいてやれ」

「了解しました」

復讐劇 準備編（後書き）

よくわからないですね
すみませんでした

復讐劇 戦闘??編(前書き)

こんな作戦でうまく行くんでしょうかね
ある意味ご都合主義です、現実だったら帝君は神様です
ではお楽しみ下さい

復讐劇 戦闘??編

午前1時45分

『こちら帝、異常なし』

『こちら待機位置に到着しました』

『了解、帝は引き続き周囲の警戒を』

『了解つと、ターゲットと思われる人物が出現した』

『では、作戦どおり頼む』

『了解、一旦通信切るぞ』

『了解した』

スーは、スーは、よし呼吸を整えて、俺は自分の愛用機・天上天下^{エア}唯我独尊^{ガシ}を構えた

ターゲットロック完了

『ターゲットとの距離およそ30メートル』

突然グラサン（仮）のイヤホンから音が鳴った

びっくりしたあ、なんだこのグラサン（仮）自動でナビしてくれるんか

気を取り直して行くぞショット

俺はターゲットから少し外して壁にぶつけた

ターゲットは周囲を見渡して、自分を狙撃した人物を特定で来て居ないからか逃げ出した

そっちじゃねえよつと、俺はターゲットを誘導するようにエアガン
を打った

グラサン（仮）のナビもあって仕事がやりやすかった
後はあいつらの仕事だな

「くそつ、誰かに撃たれた
んつどうした??おい!!」

こんな時に故障かよクソ使えねえケータイだな

ラッキーだぜあんなところに廃墟がある、相手は遠くから打って来てるここの中に入りや安心だな

そう思い廃墟のドアを開けて中に入った

「「セーの、おりやあああ」」

そこで俺の意識は途絶えた

「「ミッシェンコンプリート」」

ここで少し話が遡る

午前1時55分

「了解した」

作戦開始だな、さてと俺も準備をして目的地に向かうとするか

その前に、PCをオートナビゲーションモードに切り替えてつと

えつオートナビゲーションモードって何かって??

それは先ほど帝の天上天下唯我独尊をいじってヘッドマウンドディスプレイ改と接続してターゲットとの距離、次に打つ場所などをナビゲートしてくれる優れものだ!!

だが、帝の愛用機の天上天下唯我独尊をいじったとばれたら完全に不味いな

おっと、もうこんな時間か

不味いな間に合わなくなる、俺足遅いんだけどな
仕方ねえ走るか!!

復讐劇 戦闘??編(後書き)

次話で有可里復讐編終了・・・かな??
もう少し伸びるかもしれません

復讐劇 終末（前書き）

有可里編、いちよう最後です
見ていただけるとありがたいです

復讐劇 終末

「ミッシェンコンプリート」

僕達は作戦が成功して喜び合っていた

「そいや、あいつから連絡がねえな」

「まあ私達でバラしちゃおうよ」

といってライトを奴の顔に当てた

「……こいつ、誰??」

それは、ターゲットとは全く別の人物だった

「ハアハア、そいつは俺が説明する」

「匠!!」

「その前に少しだけ昔話をする

ある男と女の間には双子の姉妹が産まれた、しかし男と女は暴力団に追われていた、そしてついに女は殺されてしまった。」

俺はここから先を言う覚悟が出来ていた

「そこで男は双子の姉妹を道に捨てた、おそらくその男はこう考えたんだろ、このまま暴力団なんかを追われて殺されるなんて可哀想だ、どうせならここに捨てていつて誰かに拾って貰って、育てて貰ったほうが幸せなのではないかと、そして男は苗字を変えて逃げた」

そこで、神山は苦い顔をした

「その後その男は暴力団に捕まってしまった、そしてその男に子供がいると言う事が暴力団にばれてしまった、暴力団はその双子を殺そうとしたが、姉だけが生き残ってしまったらしい、がそんな事は暴力団は知らなかった、そのため姉だけが生き残ることが出来ましたという話だ

ここでタネあかしだ、その男の名前は有可咲紀 真司、いや園原真司だ

有可里、君のお父さんだ」

「嘘・・・、そんな事が」

有可里は泣きそうになっていた

「気づいた理由は苗字だよ

あかさきと言う苗字なら普通なら赤崎とかそんな感じだろうがこの人の苗字は当て字みたいだ、姉である有可里の有可に妹の咲紀さんの咲紀で有可咲紀なんだよ

これであつてますよねえ、放火魔の神山さん」

「いつから俺が起きていると気づいたんだ」

「それは昔話の途中で苦い顔してましたもん」

「お前が言っている事でだいたい正解だ、その双子を殺そうとしたのも俺だよ、まさかあの火の中で生き残っていたとわなあ」

「父さんは生きているの??父さんはどこにいるの??ねえ言つて
!!」

「いう訳がねえだろお」

「そうか、なら言つて貰うだけだ」

そう言つて俺はライターを取り出した

「待て!!何をするんだ」

「こつするんだよ」

そう言つて俺はライターで神山の左足を焼いた

「あああああああああああ」

「いい叫びだ、さあお前に殺された奴等の痛みを思いしれ、どうだ??痛いだろ、さっきの威勢はどうした」

「分かった言つ、言うからやめてくれえ」

そう神山が言つたのを聞いてライターを離した

「何処だ??」

「俺も詳しいことは知らないが、倉庫に閉じ込めているって事だ」

「そうか、倉庫か」

「倉庫は何処にあるの??」

「こつちだ、つとその前に110と、もしもし警察ですか放火魔を捕まえました」

偽名で警察に連絡して場所の説明して俺達はその場所を去って、倉庫に向かった

「ここだ」

そして俺達は重い鉄の扉を開けた

そこに転がっていたのは、白骨遺体とまでは行かないが死体だった

「父さん、父さああああん」

有可里は大声をあげて泣いた

「有可里これを見る」

俺はそう言って床を指差した、倉庫の床には文字が刻んであった

親愛なる娘達へ

すまない有可里、咲紀私達のせいでお前達を危険な目にあわせて
もしかしたら2人とも殺されてしまったかもしてない、私は何度謝
っても謝っても謝っても謝っても謝っても許されるとは思
って居ない

もう一度言わせて貰うすまない有可里、咲紀

そしてサヨナラだ

?? ? ? ? ? ? ? ? ?
? ? ? ? ? ? ? 園原 真司

有可里はこれを見て父さん、父さんと声をあげて泣いていた、俺達
にはなにも出来なかった

復讐劇 終末（後書き）

少し悲しい話でしたね

書いてて泣けて来そうでした

次の話は有可里編のその後です

仲間（前書き）

有可里編ファイナルです
どうぞ！！

仲間

次の日の新聞の一面は暴力団についての記事だった

「今日は、みんな疲れただろ
今日は、これで解散にする」

「分かった、私用事があるから、
じゃあねえ」

と有可里は少し悲しげで寂しげな表情で言った

俺は少し心配になって、

「これってなにもなかったら、ただのストーカーじゃねえか?」

「いやいや、仕方なかったんだ!!」

と自問自答しながらも後をつけた

暴力団のビル（屋上）

有可里はフェンスの前に立っていた

「こんなところで、何やってるんだ?」

俺はそう有可里に言った

有可里は少し驚いた表情になったが、また直ぐに悲しそうな表情にもどってた

「まさか、自殺しようとしてるん」そんなんじゃない!!」過剰な

否定は肯定を意味してるのとおなじだぞ、そんな事をしてどうする？？」

有可里が重い口を開いた

「私ね、妹が殺されてから犯人に復讐するといっただけを支えに生きて来たの、そして今朝その最後の支えもなくなっちゃった」

「だから死ぬのか？？お前は妹や父親、母親の分まで生きなけりや行けないんじゃないのか？？」

「そんなの、そんなの、そんなの、あんたからみりやそう言えるわよ、あんたは私見たいに何も支えがなくなっただけがあるの？？なくなっただけの人の気持ちが分かるの？？」

「ないよ、分からないよ、分かりたくもないよ！！俺にも、お前にも立派な支えがあるじゃないか」

「おゝい、匠自分だけカツコつけんじゃねえよ」

何時の間にか後ろに居た帝が言った

「そうですよ、ずるいですよ」

帝の後に続いて健人もそう言った

「やかまし！！お前等が遅いんだろうが！！」

「俺らは、お前がカツコつけてるところをその扉から見てたんですよ」

帝が屋上の入り口を指差してそう言った

「そうですよ、帝君なんてビデオまで撮ってたんだから」

「おい！！馬鹿、言うなよ」

健人は口に手を当てていた

「ミーカードー君、そのフィルムくれるかなあ？？」

「はいっ、喜んで」

「ははっあははは」

有可里が突然笑だした

「そうだねみんな！！まだ私にも立派な支えがあるね」

俺達は頷いた

「ああ、俺達は「仲間だぜ！！」

（だもんね！！）（ですわ！！）「」
おい！！台詞の美味しいところだよ」

こうして俺達は、時間を忘れてふざけ合った

もしかしたら復讐倶楽部は復讐するためだけに生まれたのでは無いのかもしれない、家族を失い自分が頼れる人が居なくなり、仲間を求めて俺は復讐倶楽部を作ったのかも知れないな

仲間（後書き）

なんか、最終回っぽくなりました
すみません

しかし、まだ続いていきます
続きも読んで頂けると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4016v/>

復讐 少年達の裁き

2011年10月9日13時50分発行